

8月27日 ローマの信徒への手紙 9章 1～9節

説教題：「あなたは覚えていますか」

先週のしゃべる会では、「キリスト者としてすべきこと・避けるべきこと」を話してもらいました。今日は、それをプリントにしたものをお配りしています。こうしてプリントの全体を見てみると、改めて、私たちが「善く生きる」ことが神様の望みであることがわかりました。私たちが何か困ったとき、どうすればいいかわからなくなった時にこのプリントを見て、「そうか、そのように生きればいいんだな」と理解する、御言葉に勇気づけられるような、そんな風に使っていただければと思います。

このように「こうしなければいけない」というリストを作りましたが、それができていない人を切り捨てるほど、神様は冷たい方ではありません。そして、あくまでも私たちは、このリストを用いて「自分ができているか」を確認することはできますが、「あの人はできていない」と指摘することはできません。それこそ、「してはいけないこと」なのです。

「わたしの目にあなたは価高く、貴く わたしはあなたを愛し あなたの身代わりとして人を与え 国々をあなたの魂の代わりとする。恐れるな、わたしはあなたと共にいる。」(イザヤ書 43章 5節)。この言葉は、墮落の結果国が崩壊した後のイスラエルの民にかけられている言葉であります。バビロン捕囚というものは、宗教的な意味においてはイスラエルの民が墮落しきってしまったことによって国が崩壊するほどの状況に陥ってしまった、と理解される出来事です。彼らが信仰の意味において秀でているか、劣っているかと言えば、「誰よりも劣っている」と言わざるを得ない状況で、その人々に対して、「わたしの目にあなたは尊い」「私はあなたと共にいる」と声をかけるのが、私たちの神様なのです。誰よりも信仰の意味で劣っていたイスラエルの民が、それでも神様から愛されているのです。私たちもまた、どのような時も、神様から確かに愛を注がれている、尊い、大切な一人一人なのです。

私たちは、何かに秀でているから神様に愛されているわけではありません。逆に何かをしてしまったから神様から愛されなくなるような、そのような条件付きの愛を神様から受けているわけではありません。神様からの愛は無条件です。アガペーという、無条件の愛が私たちには注がれているのです。私たちが信じている、私たちの神様は、罰を与える神ではなく愛を注ぐ神であるということ、厳しい神ではなく慈しみ深い神であるということ、私たちは忘れてはいけません。それを知っているからこそ、イエス様の十字架が、歴史上に行われたただの出来事などではなく、「私のために行われた」「あなたのために行われた贖いである」ということを実感できるのです。だからこそ私たちは、どうしても罪を犯してしまうこの今の私たちが、それでも「神様にゆるされている」と信じながら、日々の信仰を歩むことができるのです。

私たちは、今を一生懸命に生きるその先に、明るい未来があることを知っています。私たちの人生の行き着く先は「神様のみもと」であり、私たちの信仰の歩みを喜んでくれる神様がいます。だからこそ、神様への信仰に支えられて、神様に赦されている喜びの中で、やがて神様の元に行く希望に導かれながら、私たちは生きていくことが出来るのです。「神様のために生きる」その素晴らしい歩みを、これからも、共に続けていきましょう。

今日の説教箇所：ローマの信徒への手紙 9 章 1～9 節

- ・ 1: 信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです。他人の召し使いを裁くとは、いったいあなたは何者ですか。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることがおできになるからです。ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです。特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない人も、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです。わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるかすれば主のために生き、死ぬかすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためです。